

体験活動をサポートしていただいている方にお伺いしました

インタビュー①

相川良子さん（「ピアサポートネットしづや」理事長）

地域と学校とをつなぐコーディネーターとして都立高校の教科「奉仕」に御協力いただいている相川良子さんにお話を伺います。相川さんは、子供の居場所の運営や、学校内外の様々な教育の場に人材やプログラムを紹介するコーディネーターとして活躍されています。



相川さんは、「NPO法人ピアサポートネットしづや」の理事長として、多くの青少年とかわっていらっしゃいますが、中学校の校長も経験されている中で、最近の中高校生世代について、気になることはありますか。

- 仲の良い友だちは大事、自分も大事、ですが、他の人と一緒に行動する力がとても弱いと感じています。グループでアイデアを出し合い、検討し、方針を決め、行動する、それを振り返るという、社会で必要となる力をつける体験が少ないと思っています。
この点で、私は教科「奉仕」に期待しています。学年全体で一斉に取り組んでいる高校がありますが、一斉での活動をするには、チームワークをつけないと成果が上がらねえ。チームワークを経験できる活動を、年間の授業にどのように組み込んでいけるかが、ポイントになると思います。



具体的には、どのように進めていくことができるのでしょうか。

- 第一の段階として、地域の中での課題を見つけることから始まります。地域の方と会い、困っていることや充実させたいことを聞く中で、例えば昼間の時間帯に、地域には高齢者しかいないことに不安を感じている、ということが出てくるかもしれません。防犯や防災という点で、若い人の力がほしい、という声です。このような声を生徒がグループで集め、何ができるかを考えることから始まるのではないのでしょうか。

高校生が自分たちの感性で見つけてきた課題を、自分たちの行動につなげていくという流れですね。

- 第二段階となる解決するための活動も、地域の方と一緒に取り組んでほしいと思います。先の例でいうと、

防犯を呼びかけるポスターをグループごとに作り、内容を警察に見てもらったり、町会の掲示板に貼ってもらえるように町会長のところに説明に行ったりというプログラムにすることができます。このように目標を明らかにしたグループワークが大切だと思います。

事後学習でも、グループで活動していくためには何が必要でしょうか。

- まず、それぞれの過程で記録を残すということです。課題を探している時や、グループで活動している時に、グループ内で役割分担をして写真やビデオをとっておく。この記録を第三段階として事後学習でまとめながら、経過報告として書くのではなく、グループの中でそれぞれの活動の意味を改めて考えて書く。もっとよい方法はなかったか、さらに充実させるには何か必要か、などを話し合ってみていく。そして校内で開催する報告会に地域の方を招待するなど、地域に向けた振り返りをしてほしいと思います。

個別での体験活動を実施している高校もサポートしていただいています。

- 一人一人の生徒が希望する体験をするということは、生徒にとって充実感のある体験になります。夏休みを中心に50以上の体験内容がある高校もあります。このような学校をコーディネートする時には、体験先を探すサポートも行いますが、事前学習の中で一人一人の生徒のモチベーションを上げる、ということが大切になります。

地域と学校を結び付けながら、大切にしていることを教えてください。

- どのような形で体験活動を実施している学校であっても大切なことは、「多様な人と関わる協調性を高校生が学ぶには、地域での体験活動が不可欠である」ということを、地域にも学校にも理解してもらうことです。
教員も大変ですが、社会に出る一歩手前で生徒が身につけなければいけないことを教え、育てるためには、生徒にどのような力をつけてほしいかを話し合い、学校全体で分担し、目的を共通にしながらかつ実施してほしい。そのような教員の対応が、地域の方の心を動かし、一緒に高校生を地域で育てよう、ということにつながると思っています。

インタビュー②

多田洋祐さん（江東ボランティア・センター）

多くの都立高校では、地域のボランティア・市民活動センター（以下「ボランティアセンター」という。）に教科「奉仕」の授業を実施するに当たって協力していただいています。ボランティアセンターについて、そして地域のニーズの掴み方について、江東ボランティア・センターの多田洋祐さんに伺いました。



まず、江東ボランティア・センターの業務について御紹介ください。

- 「江東ボランティア・センター」は、社会福祉法人江東区社会福祉協議会という区民の支え合い・助け合い活動を啓発、サポートする民間の福祉団体の一部署で、ボランティア活動のコーディネート業務、手話講習会やボランティア活動に関する様々な講習会、ハンディキャブ（リフト付きワゴン車）の貸し出し、手話通訳者の派遣など約30ある地域福祉事業を行っている機関です。

江東ボランティア・センターでは、都立高校とどのようにかわっていらっしゃいますか。

- 区内の都立高校を中心に、体験活動の内容を始めとした授業に関わるプログラム作成についてのアドバイスや、地域で活動している方の紹介などを行っています。事前学習において、区内における活動も含めたボランティア活動についての講演もしています。
都立高校の支援で、重視しているのは、相談・打合せの際には必ず学校へ伺うことです。学校全体の様子や生徒の状況を見聞し、感じたことを基本に、支援の方法等を検討・準備し、学校の要望と地域でできることの調整を行うように心掛けています。

ボランティアセンターにサポートしていただく場合に留意すべきことはありますか。

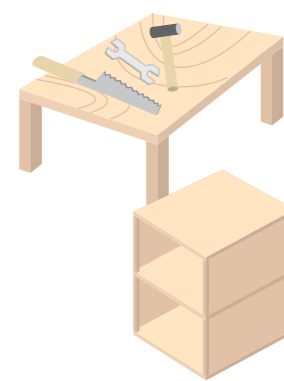
- 地域によって、職員の体制やできることは違います。教科「奉仕」は社会福祉協議会、ボランティア・市民活動センターの職員にとっても、未知の領域です。学校教育に関わり、生徒たちに何か教えたり伝えたりすることを経験しているセンターの職員が多いわけではありません。少ない職員数で運営しているセンターも多いのが現状です。
ボランティアセンターへサポートを依頼する場合、まず、それぞれのセンターの状況を掴んでおくことが大切です。そして、ボランティアセンターに協力してほしい内容をできる限り具体的かつ明確にすることです。相談は、授業実施の直前ではなく、早めにすることだと思います。

そのような中ですが、高校の授業のサポートをしていただけるのはなぜでしょうか。

- 少子高齢社会が進む中で、地域の福祉制度・福祉サービスの充実には、地域住民の理解がますます不可欠であり、中でも思いやり、支え合いの意識の醸成が特に重要です。この意識の醸成は、簡単にできるものではなく、幼い頃からの経験の積み重ねによるところが大きいと思います。社会福祉協議会の活動として、福祉サービスの充実だけではなく啓発活動も平行して行うことが、今後求められていると思っています。
また、教科「奉仕」の実施には、様々な団体との協働が必要で、外部連携先の特長を生かすことが重要となります。連携先を開拓するアドバイザーとして、ボランティアセンターへの期待は大きいと感じています。

実際に地域のニーズにあわせた活動をどのようにコーディネートされたのでしょうか。

- ある工業高校からの依頼を受けて、地域の保育園や高齢者施設などに必要なものについて調査をしました。その結果を基に、実際に工業高校の生徒が棚や机を作成し、寄贈したということがあります。生徒さんたちが心をこめて作成した作品に、地域の施設の方々とも喜んでいました。



都立高校は、小中学校と比べると、地域との接点が少ない状況にあります。高校が地域との接点をどのように作る事ができるか、ヒントをいただけますか。

- まずは、地域の方々に学校を知ってもらうことではないでしょうか。そのためにも、学校や生徒の特長を生かした授業を展開し、地域に向けたPRを積極的にすることだと思います。そして、地域の状況を掴み、ボランティアセンターを含めた様々な団体とのつながりをつくっていくことではないでしょうか。地域に関する情報を多く持っていることも接点を作る上で重要な点ではないかと感じています。